

N 響メンバーによる室内楽

曲目解説

サン＝サーンスの作品

死の舞踏 (2 台ピアノ版)

サン＝サーンスの 4 つある交響詩のなかでも、最も知名度が高い《死の舞踏》は、1874 年、19 世紀フランスの象徴派詩人アンリ・カザルス（Henri Cazals）の詩にもとづいて作曲された。冒頭、深夜 12 時を告げる鐘が 12 回打ち鳴らされ、狂気じみた不協和音を伴って骸骨たちが登場、8 分音符で刻む骸骨の踊り、墓場の夜を謳歌するような骸骨の優雅な旋律などが、形を変えて展開していく。最後には突然、暁を告げる鶏の声が響き、宴は散会となって静かに幕を閉じる。2 台ピアノ版への編曲は、作曲家自身による。

ピアノ五重奏曲

20 歳頃の作品で、演奏機会は少ないが、隠れた名品。神童と謳われたサン＝サーンスは、幼い頃に父を亡くし、母と大叔母に育てられた。1854～55 年にかけて作曲された本作は、その大叔母に捧げられている。名ピアニストだったサン＝サーンスらしく、ピアノ・パートが充実しており、技術的難度も高い。4 楽章からなり、第 1 楽章アレグロ・モデラート・エ・マエストーソは、重々しいピアノの和音で始まり、弦が奏でる穏やかな第二主題は、きらめくピアノのオーナメントに飾られている。第 2 楽章アンダンテ・ソステヌートは、厳かなコラル風（Choral style）の旋律に弦が優しく絡む。第 3 楽章プレストは、ピアノの 16 分音符の速い流れが、冒頭楽章を想起させる和音によって所々断ち切られる。第 4 楽章アレグロ・アッサイ、マ・トランキロは、息の長い旋律をチェロが静かに弾き始め、それが上声部の楽器へと受け渡されていき、輝かしい美しさを放つ第二主題へと到達。最後は華やかさを保ちつつ、堂々と締めくくる。

七重奏曲

アマチュアの音楽家でもあった数学者エミール・ルモワヌ（Emile Lemoine）が設立した室内楽協会「ラ・トロンペット」の委嘱により 1880 年に書かれた。全 4 楽章からなり、弦 5 部にピアノ、さらにトロンペットを加えた七重奏という、類を見ない編成となっている。

第 1 楽章プレアンビュールは、輝かしいトランペットの音色に、ダイナミックなピアノの分散和音が対置され、協奏曲風の響きを楽しめる。第 2 楽章メニューエは、勢いのあるマルカートとレガートの対比が魅力的。トリオではピアノの 16 分音符の分散和音に乗せて、弦が朗々と歌う。第 3 楽章アンテルメードでは、ピアノが冒頭楽章のリズミカルな中間主題を重々しく奏し、そこに憂いを含んだ息の長い旋律が乗り、弦からトランペットへと受け渡されていく。第 4 楽章は、前楽章の沈鬱な雰囲気から一転して、明るいガヴォット主題に始まり、それが 3 連音に分解されて繰り返される。トリオでは突然トランペットのシンプルな旋律が現れ、再びガヴォットに戻ると、ピウ・アレグロのフィナーレへと突入し、冒頭楽章の主題を想起しつつ、最後を盛り上げて終わる。

組曲《動物の謝肉祭》

1886 年、友人のチェリストが主催する謝肉祭の音楽会のために作曲。全 14 曲からなるが、第 13 曲「白鳥」を除いて、サン＝サーンスは生前、出版を許可しなかった。

第 1 曲「序奏と獅子王の行進曲」では、2 台のピアノと弦楽合奏によるイントロに続いて、威厳ある獅子王の主題が現れる。第 2 曲「雌鶏と雄鶏」は、雌と雄の対照的な描写がユニーク。第 3 曲「驟馬」は、激しく上下行する 2 台のピアノで驟馬が跳ね回る。第 4 曲「亀」では、オッフェンバックの喜歌劇《天国と地獄》のフィナーレの旋律が、亀の歩みのようにゆっくり奏される。第 5 曲「象」は、ピアノのワルツに乗ってコントラバスの象が踊る。第 6 曲「カンガルー」は、跳びはねるピアノのリズムが、この動物の特徴をよく表している。第 7 曲「水族館」は、水槽を悠々と泳ぐ魚の様子が印象的。第 8 曲「耳の長い登場人物」では、2 本のヴァイオリンがロバのいななきを模す。第 9 曲「森の奥のカッコウ」は、細やかなピアノの和音を背景にクラリネットによるカッコウがさえずる。第 10 曲「大きな鳥籠」は、フルートが快活な鳥の姿を描く。第 11 曲「ピアニスト」では、下手なチェルニー（練習曲）を繰り返すピアノの初心者がユーモラスに描かれる。第 12 曲「化石」では、耳馴染みのある旋律（つまり化石）が聴こえる。自作の《死の舞踏》の骸骨の踊りに始まり、ロッシーニの歌劇《セビリアの理髪師》や数種のフランス民謡が俎上にあげられる。第 13 曲「白鳥」は、本組曲で最も有名なチェロの独奏曲。単独で取り上げられることも多い。第 14 曲「終曲」では、全ての動物が再登場して、華やかなフィナーレを迎える。